法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-15

<会員談話室>偏西風と脊梁山脈がもたらす地域性

YASUMORI, Naoki / 安森, 直輝

(出版者 / Publisher)
法政大学地理学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理
(巻 / Volume)
45
(開始ページ / Start Page)
81
(終了ページ / End Page)
82
(発行年 / Year)
2013-03-21

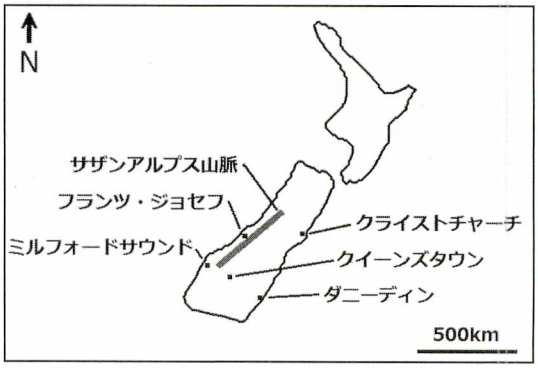
Hosei University Repository

〔会員談話室〕

偏西風と脊梁山脈がもたらす地域性

2011年度の大学院気候学ゼミナールの巡検は，佐藤典人教授と院生1名(鈴木　悠)，学部生7名(高橋　雅，中田祐太，中村宗史，倉林実央，西川玲奈，西本達也，安森直輝)の計９名で，近年，前進傾向にある氷河とその地形，および偏西風が卓越する地域における脊梁山脈とその影響を視察するために，2012年３月中旬にニュージーランド南島で実施された．行程はクライストチャーチを起点に公共交通のみを利用する形で，ダニーディン，クイーンズタウン，フランツ・ジョセフと南島を時計回りに10日間かけて巡検した．ニュージーランド南島は，南緯41～47度付近に位置し，西海岸に沿ってプレート境界があり，そこに沿ってアルパイン断層が走っている．脊梁山地であるサザンアルプス山脈が南島を貫いており，その西側斜面は急傾斜でタスマン海に落ち込んでいる．偏西風が卓越する地域ゆえ，このサザンアルプス山脈が地形性上昇を引き起こし，西海岸では多量の降水があるのと対照的に東側ではフェーン現象も相まって降水量は少なく，地域によって良質のワインが生産されているほどである．

現地の数少ない公共交通の一つで，日本でいう高速バスである「インターシティ」に乗って東海岸から西海岸へ移動すると，植生の変化に驚かされる．東海岸は，乾燥していて羊や鹿の放牧が多くみられるのであるが，西海岸は鬱蒼とした木生シダを伴う森林に覆われ，南島・南西部のフィヨルドランドの一部地域の年間降水量は10,000mmを超えるとされている．風下にあたるサザンアルプス山脈東側では，火災に対する警戒のため，写真２のような乾湿を示す標識が見られるのだが，これを写真に収めるのに大変苦労した．何せ，現地の道路は市街地を除いて制限速度は存在しないに等しく，乗車していた「インターシティ」であろうと時速120kmで大型トレーラーやキャンピングカーを追い越しながら走っている有様である．よって前方に標識を発見したとしても，シャッターを切るのが間に合わないのである．この標識



第１図　ニュージーランドの概略図

写真１　教授の知人・エリスさん宅で
(2012.3.13・筆者撮影)

写真２　乾湿を示す標識
(2012.3.14・筆者撮影)

Hosei University Repository

写真３　上空から見るミルフォードサウンド
（2012.3.16・筆者撮影）

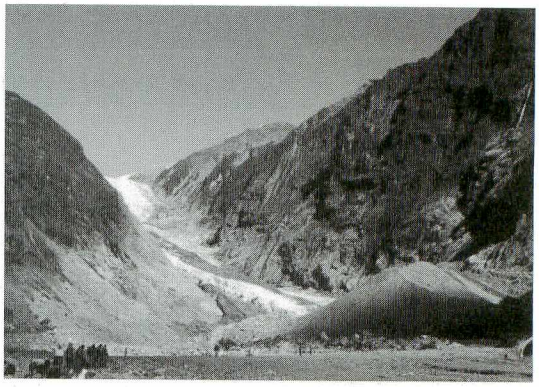


写真４　フランツ・ジョセフ氷河の末端部
（2012.3.19・筆者撮影）

は，西海岸には殆ど見られないことから，偏西風と脊梁山脈がもたらす気候景観の一つと言うことが出来よう．

フィヨルドランド地方には，大小多数のフィヨルドが見られるのだが，このうちのいくつかは観光地化されており，クイーンズタウンから日帰りツアーが設定されている．我々がクルーズツアーに参加したミルフォードサウンドは，奥行きは15km程のフィヨルドで最もアクセスが良く，港はもちろん空港も建設され，気流が安定していればクイーンズタウンまで遊覧飛行をすることも出来る．クルーズ船は数百mの段崖を一気に落ちるカスケードと言われる滝の下に突っ込み，浴びると幸せになるらしい飛沫を乗客にサービスしたりしながら，タスマン海まで往復した．タスマン海が見えるまでは海とは思えない静けさであった．フィヨルドの谷壁が階段状になっている所もあり，時代によって異なった氷河の消長を示していることが理解できた．帰路は幸運にも気流が安定していたので，たまに墜落するらしいセスナ機の遊覧飛行を選択し，フィヨルドやU字谷，氷河湖，植生限界などを俯瞰しつつ，陸路では5時間かかる行程を僅か40分弱でショートカットしてクイーンズタウンに戻った．しかし，はるばる帰路もバスで帰ってきた教授に「生きていて良かったね」と言われたことが妙に心に残っている．

サザンアルプス山脈には100を超える大小多数の氷河が分布しており，サザンアルプス山脈東側の主な氷河としてはタスマン氷河やフッカー氷河が挙げられる．サザンアルプス山脈東側の氷河は気候変化に反応して近年，後退しているのに対し，西側のフランツ・ジョセフ氷河やフォックス氷河は，それと対照的に1970年代から前進傾向にある．氷河に行くためには，氷河ウォークツアーに参加するか，氷河遊覧ヘリに乗る等のいくつかの方法があるけれども，我々は氷河ウォークに参加した．氷河の末端は削剥されて堆積した岩石の山であり，どこが氷河の末端であるのか正確に把握するのは困難であった．ウォークコースの途中からはアイゼンを履き，氷の上を歩くことも出来た．勾配が急である等の地形的な要因で，涵養域を見ることが出来なかったのは残念であった．小さなクレバス状の割れ目の中で集合写真を撮ってもらえるので，一般の観光客も十分に楽しめる内容となっていたと思う．氷河から流下するワイホ川は，氷河による砕屑物で灰色に濁っており，氷河の持つ営力の強さを改めて認識させられた．

10日間という短い期間であったが，ニュージーランドの自然環境はもちろん，良く言えばアバウト，悪く言えば適当な，現地ののんびりした雰囲気がとても好ましく感じられ，再訪したいと思う国になったのは言うまでもない．最後に，この様な貴重な機会を与えて下さった佐藤典人教授に感謝の意を表して本稿の結びとする．

［安森　直輝・法政大学文学部地理学科３年生］